

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 三好俊介

三好俊介氏の論文「エヴゲニー・バラトウインスキー ―対話の詩学―」は、19世紀ロシア初頭の詩人バラトウインスキーの詩について、主に「対話の詩学」という観点から分析と解釈を試みたものである。バラトウインスキーは19世紀前半のロシアではプーシキンに次ぐ重要な詩人とされながらも、日本ではこれまで本格的な研究は皆無という状態であった。三好氏の研究はその空白を埋める第一歩として、まず日本における先駆性が高く評価されよう。

論文はほぼ時代を追ってバラトウインスキーの詩作の全体像を描き出しながら、「哲学的抒情詩」「恋愛詩」「寸鉄詩」などの様々なジャンルにおけるバラトウインスキーの独特の詩学を分析していく。バラトウインスキーは一般に孤高の「思考の詩人」と呼ばれ、その創作は難解なものとしてきた。しかし、三好氏は先行研究を十分広く調査する一方で、バラトウインスキーのテキストの原点に立ち返ってその緻密な読みを試み、必要に応じて伝記的背景や、同時代の西欧の思潮、さらにはプーシキンなどの同時代の詩人との関係などを考慮に入れながら、その作品に織り込まれた詩的論理を丹念にときほぐした。その結果、三好氏が提示し得たのは、読者との対話を拒否した孤高の存在ではなく、常に開かれた姿勢で読者に向かい、理解を求めようとする「対話の詩学」の実践者としての詩人の姿である。三好氏の主張によれば、バラトウインスキーという詩人のユニークな現代性は、まさにこのような独自の「対話の詩学」に由来するものである。

審査の過程では、欠点ないし改善が求められる点についてのいくつかの指摘もあった。それは例えば、(1)「対話の詩学」を中心的テーマに据えているにも関わらず、作者―読者の関係や、文学作品の読者による受容といった問題についての理論的考察が不十分である、(2)伝記的概観や研究史がごく簡潔に最後に添えられているだけで、本文の記述と有機的に溶け合っていない。特に伝記的要素は詩の分析に際してもっと効果的に活用できたのではないか、(3)バラトウインスキーの独自性を強調する反面、歴史的な文脈や同時代の環境があまり具体的に描かれていないため、彼の位置付けに関する主張に説得力が欠ける嫌いがある、(4)ロシア語の詩作法とその歴史の理解に関して若干の不正確な点が見られる、といったことである。

しかし、本論文を全体として評価すればその先駆的業績としての価値は極めて高く、また難解とされるバラトウインスキーの個々の作品（特に長編詩「最後の死」や詩集「たそがれ」など）の読解は緻密かつ明快であり、創見も少なくない。本論文が日本での19世紀ロシア詩研究の分野における重要な一歩となる優れた業績であることには疑いの余地はなく、審査委員会は全員一致で本論文が博士（文学）の学位に十分値するものであるとの結論に至った。